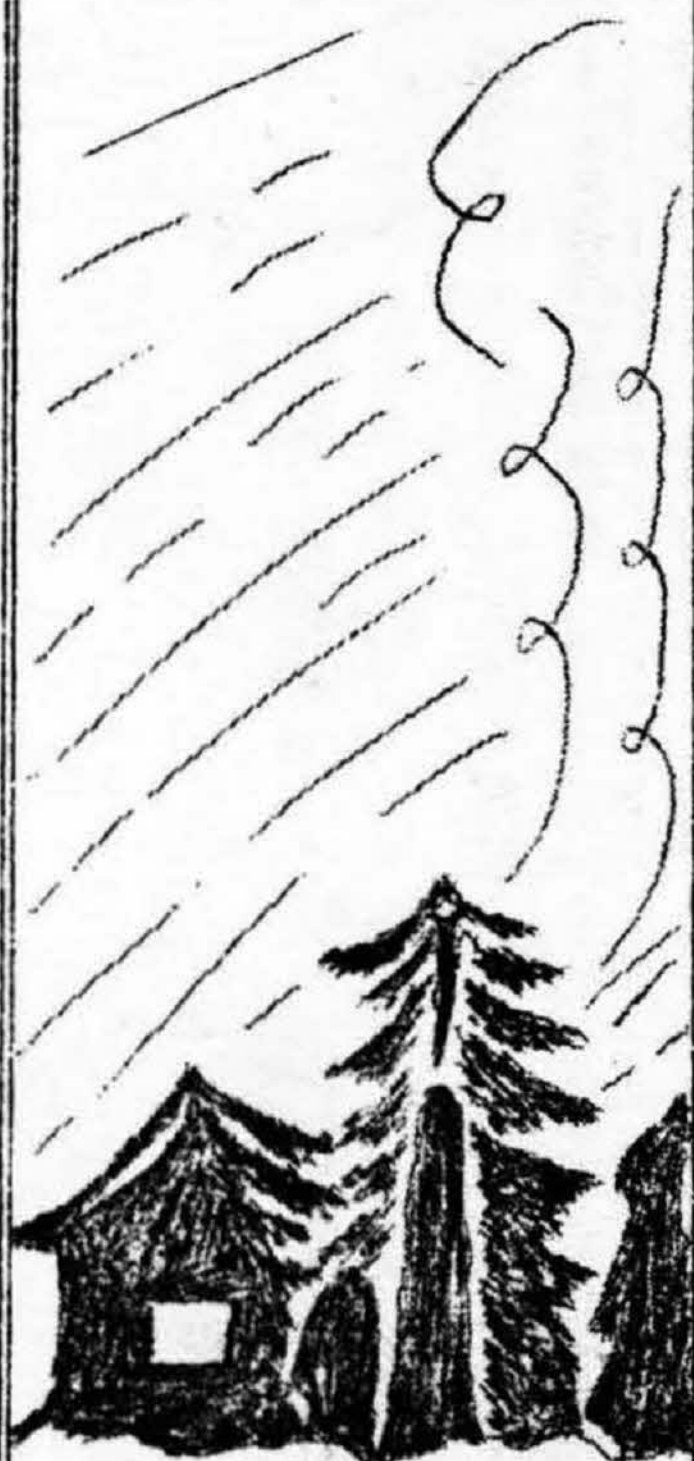


## 會報



第三年第六号

昭和七年九月五日発行

通巻二十一号

## 武能澤と蓬峠

七月二十三日の夜、例によりコンとペン、それに親類のSが臨時に参加して四人連れとなる。此の前、谷川へ行った時、堀岡のやった役目は當然若手のSだ、湯檜曾へ着いたらチャンと弁當は買ってた。

西黒沢の落合より少し先の所で朝飯をとる。何しろ優秀なるトンカツを三枚持って行ったんだから可なり普通よりは豪遊である。

マチが沢の出合まで河原を行った。徒歩三四回、此の沢の落口から見た上流の景色は、夏以外の時はもつといふと思ふ。一ノ倉谷の突き當りにある岩壁は實際立派なものだ、一度は行って見たい所だ。

武能沢は學聯報告の出駄羅目な記事とは大部違つて居た、滝は小さいのも数に入れれば五つ許り

ある。その中、二つは十米突以上もあるか、又は二つとも滝の水から一間と離れぬ右側を登るのだ。第二の滝を最後にペンが登らうとする時、Sがクマの上着を忘れたのを思ひ出したのでペンに見に行つて貰ったが無かつた。多分最初の滝の下に置いて来たのだろう。上着もだがそれに附けて置いた「一橋」とあるスキ一のメタルが惜しかつた。今頃は上着の方は雨にうたれて腐つて居るだらうがメタルだけは武能沢の岩陰から周章しい夕立雲の去来を眺めてゐる事と思ふ。

清水越の道に出てから、藪の中をがさ／＼大汗を流しながら、やつとの事で白樺小屋跡の所へ出た。

雪なんかは殆んど見當らず、周囲の山々でさへ草いきれで蒸されて居る様だ、風もない全くこんな熱い山登りは初めてだ。

鉄道省第一白樺ヒュッテで暫く休んでから、峠へ登る。苗場なんかも見えたが、蒸し暑くてやりきれぬ。笠の右手から妙な形の雲が出て来たが面白くない。

蓬峠の降りには全く閉口した、道はよく踏めて居るんだが、草や笹が高々とかぶつて居て、どうもならぬ、寂寂丸原のトンネルの狭気浴の所まで

この状態だったのは、果然として噴飯も出来ない。

腹は余り空かなかったが、ひどくへばってある所へ、中里駅の前通りの旅館で呑んだ怪しげなおかつとかいふビールがたいて、湯沢の駅で汽車の出るのが待ち切れず、乗客、下車客一統監視の前で、しやがみ込んで脱糞行為に及んでしまふ。此の冬、湯沢へスキーに来て寄ったといふ様子を顔をして駅前の賣店に這入り込み、二階に上り込み、布団を出して貰ひ、寝込んでしまった。「上りま

でには三時間ある。これで私達トリオは夏の上越にすっかり懲りてしまったといふ訳である。一人減ったのはSがトルネルから若気のいたりで元氣一杯中里へ猛進、断然終列車に間に合ったからなので、トリオは一

(クマ)

# 雨中漫歩

七月十六、十七と二日間の休日を得たので、二十万の地図を拡げて行先を物色したところ、武尊山が第一候補にあがり研究の結果前武尊の小屋に泊って翌日藤原に降ることに決めた。例の十一時

二十分上野駅で出かける。沼田に三時二十五分着、七時半の乗合を待つのも馬鹿らしいので、まだ夜の明けない沼田の町を歩いて川場湯に七時半着いた。途中から道に雨となる。都館で休憩する。天候回復の見込立たず、藪くぐりの武尊登山は道に断然し、方向転換して九時の乗合にて沼田に戻り、更に後雨猿ヶ京とバスのリレーを行ひ、猿ヶ京より雨中をチカッて二時法師に着いた。法師は山中の湯宿らしい感じが有り浴槽の底に小石が敷かれ、てゐるのも気持ちがよい。が宿料其他の物價は高過ぎる様である。隣室にて夜半まで悪戯放歌してゐた風俗には頗る悩まされた。翌十七日も雨、九時雨を冒して林道に入る。ト口道をはづれて一気に二、三百米直登する。それより山を右にして山腹を通じ、多少の昇降あり、二、三の水流を渡り、正午峠の休憩所に着いた。小休の後四万川の支流に向つて一気に降る。降り着くとト口道に出でそれよりレール沿ひに歩く。枕木の *space* と *Pace* とが合はず歩き難い。やがて四万川本流に出で、更に降って四万の田村旅館に入る。雨漸く霽れる。五十米の温泉プールにてクロールの神技を遺憾なく発揮し、横球には天才を示して、四時半のバスにて九里の道を一気に並川へ向つた。独り旅は至って気軽である。川場湯は体温湯である。都館

は奇麗で氣持が良い。

(平家蟹)

### 彦島だより

原稿を毎度請求され乍ら筆悪癖の爲沙汰無しに過して申訳ありません。

島に住むと、海には縁が近くなりますが山とは一寸離れた気がして寂しくなります。

五月頃この島で一番高い砲台山(俗称)へ登つて見ようと熊笹をかき分けて百米位登った所鉄條網と陸軍省の制札とに出會して止むなくすじと下りました。

九月に芥蘭陸上チームが松江で競技會をやる筈です。若し行けたらいいで、大山か三瓶へ行つて見ようと考へてゐます。

此の島には不思議と昆虫類が少く中島兄に頼まれた甲虫類採取の約を未だ履行出来ずに居ります。珍しい植物もなく、井戸水の鹽からいのが変つてゐる位のもの。

二度許り玄海灘へ釣りに出掛けましたが中々面白くないですね。九州の山々も登りたいと思つてゐますが、目下の所相棒と時間と金の無いが不都合です。

正月の上京とスキー行を楽しみにしてゐます。

(中森長太郎)

### 南國へ

南國といふのも大袈裟だが、といふ書出しで一年の夏紀州旅行をされた先輩若一郎氏が當誌に報告されてゐる事を頭のよい諸氏は忘れてゐるだらう。今夏小生は同じ紀州乍ら少し南の方を旅行して来た。これを南國といふのは——先輩N氏よ決して大袈裟では無いのですぞ——植物学的根據があるのです。詳しくは尺今八王子にあつて此の稿を綴る小暇も無きまでに繁忙を極むる同行久保田君に御質問下さい。

閑話休題 七月中旬帝都の炎暑將に酷むらんとする頃、急に手塚、久保田両君から訪があつて紀州旅行を誘はれ、早速に同行を約して準備した処出発當日になつて手塚君の家に不幸があり、一日遅らして久保田君と二人で出発、大阪で久方振りに、高木、赤城、高瀬の諸氏に御眼にかゝる。白砂青松の芦屋なる高木氏の御宅に夜まで御邪魔して再び大阪に引返し、紀州勝浦行急行船に乗る。歌で有名な串本守に寄港して終点勝浦に着いたのは朝九時勝浦は深く湾入して全く波無く眺の好い所、その上湾内四五ヶ所に湧出する温泉が皆町から四五丁離れてぽつり／＼点在し互に船又は自動車で連絡されてゐる。

その日那智滝を見物、帰つてから湾内の島めぐ

りをする。洞穴中に此の辺では湯の峯にしかないと言はれ「ゆのみぬしだ」を発見して久保田君大喜び、夜ボートを漕いで町の方へ行き散歩する。全く気持の好い清遊であつた。

翌七月廿日朝五時と言ふに起床、汽車にて新宮に行きプロペラ船なるものに乗つて瀧八丁を見物、本宮に下船して自動車で湯ノ峯温泉に至り一泊、プロペラ船とは水底が浅い為普通のモーター船では溯行出来ぬので飛行機のエンジン様のものを船の後に取付けてプロペラを廻転させ水上を飛ぶ様に走る仕掛のもの。壮观ではあるが騒々しくて船中話もならず。瀧八丁に就ては今更喋々するまでもない。

亦一日は再び新宮に引返して町を見物して一泊、翌日自動車で難行宇治山田に出ました。

毎朝早いのと、七月の晴天続きに焼かれて全く閉口しました。流石に久保田君も最後の日は眼前数歩に妙らしい植物を見逃し、山田では内宮、外宮の参拝も割愛して了ひました。

東京も丁度暑熱最高度に達した折柄、植物鬱葱と茂り、陽光燦として輝く水の国（まこと記は木に通ずる由）を旅して動物学的見地からしての南国なる事を証明した次第でした。

（金田一郎）

# 彌平四郎

彌平四郎の子供の数が百三十人公郎が逃れ／＼て此飯置山麓へ落付いたと傳説を持つ彌平四郎は今や狭い谷間に小さな部落を作り、同族結婚を重ねて今や戸数三十、人口二百人餘りとなつた。

四時此の最奥の部落へ入り込んだ時、第一に驚かされたのは子供の多い事だ、小川を囲む両側の道から子供の顔が続々現はれる。然かも私達一行五人が泊つた宿屋仙台屋は道ばたに面した部屋へ私達の行動は此の子供達に監視されてる訳だ。

田舎の金踊り、未だ見た事が無い。此んな山奥の金踊りは又変つて居る事だらうと思ひ、楽しみにして来て見たのだ、二三日子供が死んだので今度はやらないと云ふので、かっかりしてしまつた、ローカルカラーと云ふより、グリーミテイブな金踊りを見損つた。

聞けば二三才位の赤子が続々たをれ、最早や三人も此の谷間で死んだ風だと云ふ。百日せきらし、小学校に先生一人と云ふ彌平四郎では医者を呼ぶにも二里河下の部落まで呼びに行かなければならぬのだ、だから医学的に全然無智な人達は、此のバイキンの暴威に唯手を拱ねて居るより外は仕方ない、悲慘な事実だ。

こうして自然淘汰され、多い子供の数も減少して行くのだらうが、餘りに人間離れがして居る。生めよ、増せよ、一家平均七人位の子供が居る、私達の泊った仙台屋では最初の晩はどうも宿のおかみさんから子供のたをれる話をきいてる時、家の中から子供の苦しうなせきが聞えると思つたが、飯豊山から私達が帰って再び泊った時此の子供が晝間遂にやられた事を知った。餘りの痛ましさだ。

此処の人は腕作りを以て生業として米は餘り取れない。自足経済をやらない此の人達には、不景気は深刻らしい、意地の悪い収税吏は、あらゆる卑劣な手段を用ひて此の哀れむ可き村人をいためて、ドブロクの密造を探し歩いて居る。

冬のスキー

(晴 確)

又は最近「Schatten」影人の書いた「Aiguilles」(針峯)といふ本の中にある一章です、この本はその名の示す如くモンブラン附近のエキユに纏る着者の隨想を綴つたものです。最後の方エキユに纏る着者の隨想を綴つたものです。最後に綴つた写真の数葉の「Abbildungen」が附いて居ます。

「こんな風な陽気な日々に山で一緒に暮したあの仲間は最早此の世には居ないのだった。あいつは、あの熱情的な勇士はひどいあらしと闘ひ乍ら、シエルシエン山稜で落ちてしまった。

どんなにか彼は子供らしい麗らかな笑ひ方をした事だらう、そして自分で「俺の縄張り」と云つて居たノイヴァツツ氷河の畔に張られたテントの前で歌つて居たわけ。一九一〇年八月に幾分壊れかけたチロレットとユツテで愉快さうに人間らしい住みこしやうとそこいらの穴を塞ぎ廻つて居た事もあつた。そんな時、例のガリ／＼喘り走る鼠の野郎はやっぱり自分達の通路を見付け様として居たが俺達は一日中雪に降り込められて居たんで、いつを追拂ふ仕事に忙しかつた。松の木から取つて来たクリスマスの小枝に俺達はお燈や御馳走なんかを枝もたわゝと一杯にくつつけて、そいつに向つて歌つたものだ。

オ、タンネンバウム、……………

お前はいつか、雪の降る冬、

そして夏はいはずも……………

青々として……………

あつては全く勇致に暴風を突いて、雪崩が前後左右に落ちて居る時にさへ雪斜面に出て行つて、俺達に向つて、タツタラタツタとやって見せてた

風はビュウ／＼とまともに無慈悲に氷の針をぶつけて居た。あいつは何処でだつてあの大胆な登攀技術を充分に満足して遂行しなかつたなんて事はない。

そうだーそれなのにお前は黒い毛のオベツクセルはせして愉快な山友達は *Nests* を最後の山旅として、故郷のチロールで永遠に逝つてしまつたのだ。

……ヘールマン、彼奴とははじめて、氷のモンブランへ足を踏み入れたが前後向もなく、ウンガラウで消えてしまつた。

……フイシャーゾーチン……その他總ての者其の影、そして又影、それが皆シャローンに連れて往れてしまつて、後には只、夫が痛ましい思ひ出許りしか残して行かなかつた。

俺の周囲はこんな風にして益々淋しくなつて行く許り、そして思はず身震ひが起つても来るんだ。

(熊)

會員消息

茅川総一 大村商店より八月下旬下坂、

久保田禮治、金田一郎、七月十七日紀州めぐり、

吉澤一郎、近藤恒雄、村尾金二、七月二十三日上

曜上州武能沢遠峰行

矢作太郎、七月十六、七日法師より四万温泉行八月

には藤原より尾瀬入り、八丁の湯めぐり、

久保田礼治、八月一日より八王子店詰、八王子旭

町一〇、

宇佐美敏夫、オリンピックにて活躍す、九月三日

帰朝の豫定

中川孫一、八月中旬妹弟と共に三回目の富士登山をなす。

中森長太郎、七月下旬出京す

手塚晴雄、八月十七日より五日間東北飯豊山行、

通信欄

小生のリュックとシユラーフザックを誰方に御貸ししたか失念して困つて居ります、御所持の方は至急お返し願ひ度う存じます。(金田一郎)